

## 自主管理の基本的諸問題 覚え書き

——プラクシス派の自主管理論——

岩 淵 慶 一

最近、国際的にマルクス主義者たちによって「自主管理」(samoupravljanje, Selbstverwaltung, autogestion, selfmanagement) についての議論が活発におこなわれているが、それらのうちでもっとも注目に値するものの一つが、ユーゴスラヴィアの『プラクシス』派によって展開されてきた自主管理論であることは疑いない。彼らは、スターリンとの決定的な決裂後ユーゴスラヴィアが採用してきた独自の社会主義、すなわち自主管理社会主義の理念をいっそう発展させ、それによってたんにソ連型の国権主義的社会主義にたいしてだけでなくユーゴスラヴィアの現実にたいしても鋭い批判を展開しうる遠大な視野を切り拓いてきたのである。

『プラクシス』派に共通した見解によれば、自主管理のもっとも基本的な理念は、疎外された労働の止揚についての若きマルクスの構想のなかでその核心をなすものとして提起されたのであり、それは、一言でいえば、対象化された労働にたいする決定権を独占しているところの、生産者にとって疎遠なあらゆる社会的諸力を廃絶することを意味している。このような意味での自主管理が実現されれば、その時はじめて疎外のすべての形態からの生産者の十分な解放のための、彼らの自由な連帯と発展のための決定的な条件が創造されたことになる。この理念はマルクスの思想の成熟にもなって彼の『資本論』、『フランスの内乱』などの後期の諸著作のなかでいっそう具体化され明確な内容をあたえられたのであるが、この派の代表的な哲学者ミハイロ・マルコヴィチによれば、その基本的な構成諸要素としては以下のような諸条件が挙げられる。

(1) 労働過程の調整は生産者自身の手委ねられるべきである。つまりそれは、どのような特殊な職業のものであれ、唯一の歴史的主体として残りのすべての人間を客体を扱うように操作する指導者の独占物であってはならない。(2) 生産者たちは結合していなければならない、しかも自由に結合していなければならない。それゆえに、

自主管理は、その反対者が叙述し、またしばしば実際にそう思われているように、社会のアトム化および非統合化とは同義ではない。それは統合化を前提しているものであり、そしてこの統合化は自由でなければならない。(3) 結合した生産者たちによっておこなわれる生産のコントロールは意識的かつ計画的なものでなければならない。すなわち、自然との交換は合理的な仕方調整されなければならない。盲目的諸力の支配に委ねられてはならない。それゆえに自主管理は恒常的な方向づけを、偶然の除去を、前提している。そしてこのことは、さらにまた、科学と文化の発展を前提としており、この発展の目標の明確な理解を前提している。(4) 物質的生産の共同体的コントロールおよび方向づけは人間のエネルギーの可能な最少の部分によっておこなわれるべきである。というのは、物の管理(人間についてはいうまでもなく)もまた自己目的ではなく、自由な、創造的な、自発的な活動を保証するためのたんなる手段でしかありえないからである。(5) 自主管理は、社会のかなり高度な発展段階にもとづいてはじめて可能になる。それは、マルクスの言葉にしたがうならば、長期にわたる、苦痛にみちた発展史の成果であるような物質的土台を必要としている。(6) 自然との交換がおこなわれる諸条件の問題にするさいに、マルクスにとってもっとも重要なことは、最大限可能な有効性、自然にたいする最大限可能な速度での力の増大、最大限可能な富ではない。もっとも重要なのは、この過程が、労働者の人間性に真にふさわしい諸条件のもとでおこなわれるということなのである。

このように『プラクシス』派は、マルクスの古典的諸著作における資本主義批判にもとづく彼の共産主義論にさかのぼって自主管理の理論を構築してきたのであるが、そしてこうした作業が彼らのもっとも重要な功績の一つであることは疑いないが、しかし、よりいっそう注目に値すると思われるのは、彼らが、自主管理論が論理的に前提している規範的前提をもとめ、さらにそこから出発

して自主管理論をいっそう豊富化してきたことである。彼らが到達した共通の見解によれば、自主管理論は人間の自律、人間の自己決定 (self-determination) の概念を前提しているのであって、この概念が正当なものとして受け容れられる場合にはじめて前者の理論も正当なものとして受け容れられるのである。問題はこの概念の中味であるが、この点についてもっとも立ち入った議論を展開してきたマルコヴィチによれば、それはつぎのように定義される。すなわち「自己決定とは、諸個人の意識的な実践的活動が個人的および集団的生活の必要かつ十分な諸条件の一つになる過程である。」そしてマルコヴィチによれば、このように定義される自己決定がどのような社会的諸条件のもとでますます多く実現されていくのか、という問題こそが自主管理の根本問題をなしているのである。彼の考えによれば、この問題にたいする解答としてつぎのような条件群を挙げることができる。

(1) 社会的諸過程の方向づけは経済的および政治的権力の独占を享受しているどのような制度の掌中にあるべきではなく、人民自身が彼らの共通の利害にかかわるすべての問題について決定を下さなければならない。このことが可能になるのは、社会のすべてのレベルで人民が彼らの疎外されざる代表者たちによって構成される評議会連合に組織されている場合だけである。(2) 人民自身が彼らのおかれている状況にかんする、その現存の諸傾向およびその諸限界にかんする、将来の発展の諸可能性にかんする信頼に値する知識を獲得していなければならない。情報への事前の接近の可能性。社会的決定作成のあらゆるレベルにおける批判的研究集団の形成。(3) 決定を方向づける人民の真の一般的意志は、開かれたコミュニケーション、批判的見解の自由な表明と対話を通じてだけ形成されるのであるかぎり、強力な、民主主義的な世論が存在しなければならず、それゆえにマス・メディアのいかなる独占も排除されなければならない。そのような独占は支配的エリートに、他の人々を操作し、人工的諸欲求をつくりだし、イデオロギーを押しつけ、「声なき多数者」の同意によって支配することを可能にさせる。それゆえに、マス・メディアは自由でなければならない。真に社会化されていなければならない。(4) 人民が真の自己を、つまり彼らの現実的な普遍的諸欲求を見出していなければならない。この条件は根本的なものであり、到達するのがきわめて困難なものである。まさにそれゆえに、今日の社会において自由の名のもとに通用しているもののほとんどは、たんに幻想的な自由にすぎないのである。この条件は、普遍的なヒュー-

マニズム的観点を前提しているし、また実践的には、新しい社会主義的文化の創造と教育全体のヒューマニスティックな変革を前提している。

これらの諸条件が「自主管理」という言葉のもとに通常考えられてきたものよりも、はるかに豊かな内容をふくんでいることは、そしてまたそれらの諸条件のいずれもが現存する自称社会主義の諸国の現実にたいする根本的な批判をふくんでいることも、明瞭であろう。

このように『プラクシス』派は自主管理の理念をいっそう深め発展させてきたのであるが、これによって彼らは従来のマルクス主義の水準を超える遠大な歴史的視野を獲得し、その高みに立って、彼ら自身もアンガージュしてきたユーゴスラヴィアの自主管理社会主義の運動の現実を批判的に考察してきた。そして、ユーゴスラヴィアの経験を総括しながら、たんにユーゴスラヴィアにとって重要な問題であるだけではなく、民主主義的な社会主義を実現したいと思っている者にとって一般的な意味をもっている諸問題を深め発展させてきたのである。それらのうちでもっとも根本的なものと考えられるのは、以下のような諸問題である。

(1) 自主管理と商品生産の矛盾。自主管理はその本質において労働疎外の止揚を、したがって労働疎外へと通ずる商品生産の止揚を前提している。しかしながら他方では、自主管理は政治的諸権力からの労働者集団の相対的自立性を、客観的な規準にもとづく労働の報酬の支払いを前提しているが、これは、今日の歴史諸条件のもとでは、ただ市場によってのみ可能である。したがって、自主管理は商品生産の一層の発展へと導き、結局のところ新たな諸条件のもとで労働の疎外の再生産へと導くようにみえる。

かつてマルクスは、商品生産社会においては「交換者たち自身の社会的運動が彼らにとっては諸物の運動の形態をもつのであって、彼らがこの運動を制御するのではなく、これによって制御される」ことを洞察し、商品生産にたいする批判のなかで「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体」を展望していた(『資本論』第一巻第一篇第一章)。マルクスのこうした批判を思い起こすならば、ここで提起されている問題がいかに深刻なものであるかは明らかである。この問題にたいして『プラクシス』派は、一方ではソ連型の国権主義的社会主義による商品生産の不当な制限の経験をふまえ、他方では、一人あたりの国民所得が

きわめて低い社会においては市場経済の決定的な廃絶が到底歴史的課題にはなりえず、それはあふれ出るほどの豊かさが実現された社会においてはじめて提起されることを強調し、つぎのような方向に解決をもとめている。すなわち「物質的にあふれ出るほどの豊かさの状態から遠くはなれた社会においても個々の領域では商品生産とその法則を廃止することができる。重要なことは、この進出が量的に可能な限り多いということではなく、その構造からしてそれが人間的諸欲求の刺激と再生産を可能にさせるということなのである。そこで、たとえばユーゴスラヴィアにおいては教育、保健制度、社会保障、文化の諸領域では商品一貨幣関係が克服されている。」(マルコヴィチ)

(2) 個々の集団が解放されているが、しかしまだ全体としては解放されていない社会、したがって特殊的諸利害の自由が万人にたいする万人の闘争に変質退化する恐れがある社会、このような社会においては、社会の普遍的諸利害を実現するさいに媒介をする国家への欲求が存続する。この媒介者はまたその特殊的諸利害をもち、それらの利害は、自主管理を一層発展させようとする諸利害と衝突せざるをえない。そして国家の力が強大なものになればなるほど、自主管理はたんなるイデオロギー的幻想に引き下げられざるをえない。このことはまた、自主管理諸機関においても全体としての社会においても政治的疎外の典型的な諸形態の再生産へと導かざるをえないであろう。

これは、社会のミクロ構造のレベルへの自主管理の端緒的形態の導入がマクロのレベルにおける、つまり中央の政治的諸制度における官僚主義とその力の増大を排除しないという問題であるが、『プラクシス』派の考えによれば、こうした二元論はそう長くは続かないのである。自主管理が、そこにおいて労働者評議会が純粹に形式的でフィクティブな役割を演ずる集団主義的な競争社会へと変質退化して行くか、それとも国家機関そのものが徐々に廃絶されて自主管理機関へと移転されて行くかのいずれかであり、もとより後者が、つまり自主管理を頂上にいたるまで実現していくという方向が目指されなければならないのである。

(3) 現在の歴史的諸条件のもとで自主管理を実現するためには、一方では、個々の集団が個々人の相対的な自由とイニシアティブを保障するのに十分なほど小規模なものでなければならないように見える。それにたいして、他方、自主管理の実現のためには生産諸力を発展させなければならない、あふれ出るほどの豊かさの水準に到

達していなければならないのであるが、そのためには、現代の科学と技術の諸成果を適用し、複雑な経済および社会的諸過程を合理的に調整し誘導しなければならない。そしてこの欲求の実現のためには小規模なシステムではなく大規模なシステムを、またある程度の集権化を必要としている。したがってこの二つの要求は明らかに矛盾しているようにみえる。

ルソー以来民主主義とシステムの規模の問題についての議論が展開されてきているのは周知のことであるが、この問題にたいする『プラクシス』派の解答は、提起されている矛盾が実はみせかけのものでしかなく、両者は両立が可能であるということである。彼らの考えによれば、自主管理の社会自体の枠内で巨大なシステムを構築するという選択肢のみが残されているのである。この解答は、自主管理が経済的合理性の原理にたいして十分な配慮を払わなければならないということをもふくんでいるが、この問題は立ち入って論ずるに値するもう一つの根本的な問題を構成している。

(4) 自主管理と有効性の矛盾。大多数の諸国において今日もなお有効性をいっそう高めることが自主管理の必要条件の一つであることは疑いが無いが、この条件と自主管理とが両立せず、自主管理が有効性を破壊してしまう場合も生じるようにみえる。

これは自主管理に反対する主要な論拠にされている根本的な問題であるが、この問題にたいして『プラクシス』派は、つぎのような諸条件が充たされるならば、両者は両立可能であると主張している。(1) 統合的自主管理の確立。あらゆる個人は、彼が労働している基本単位および彼が生活している基本単位において直接的な決定権をもっているだけではなく、代表者を通じてより高次のレベルにおける間接的な決定権ももっている。あらゆる単位はその特殊な利害の問題について決定に必要な自律性と責任をすべてもっている。しかしまたどの単位も孤立したアトムではなく、体制のその他の諸単位と協力し諸利害を調和させる用意がなければならない。他方、自主管理のより高次の諸機関はその下部諸組織の特殊な諸利害にたいする最大可能な理解をもたなければならない。それらの諸機関は国家機関とは異なり、抑圧しないし、干渉を最少に減ずる傾向をもっている。しかし、共通利害の問題においてある一つの政策が広範に論議され承認されたのちには、その決定が拘束力をもつものでなければならない。要するに、あらゆる単位はアトム化されているのではなく、統合されていなければならない。(2) 前述の自己決定の条件の(2)(3)(4)の実現。(3)

決定過程の諸段階およびそれらの段階で必要とされる知識と能力の分析から導き出される諸条件。合理的な決定の過程には、事実発見的、分析的、情動的機能、統治的、政治的機能、技術的、管理的機能の三つの異なった機能が存在する。そして、これらの諸機能に照応した三つの異なった知識が存在するのである。すなわち、事実にかんする理論的知識（……であるということを知ること）、一定の状況における人民の基礎的諸欲求にかんする知識（何がなされるべき善であり正義であるのかを知ること）、基本的諸決定がもっとも有効に実現される方法にかんする知識（いかに為すべきかを知ること）。したがって、一定の時点における基礎的諸欲求を理解する賢明な、経験豊かな人間たちによって構成される自主管理の機関に加えて、一方では、採用されたプログラムの実現および内的および外的な諸要素の変化を批判的に研究する分析家の集団が、そして他方では、「いかに為すべきか」を知り、具体的な二者択一的な政策諸提案を念入りに仕上げ、もっとも有効な可能な方法で自主管理機関の決定を実現させようと試みる人々によって構成された技術的管理部が存在しなければならない。そのさい自主管理にとっての主要な危険になりうるのはテクノクラシー的傾向であるが、この傾向に対抗するために自主管理は、少なくともつぎのような三つの可能な方法をそなえていなければならない。(a) 情報への自立的接近。(b) 管理部は提案をつねに選択されるべき選択肢という形式で自主管理機関に提出しなければならないという鉄則。(c) 管理者を選出し、再選し、置き換えるという権利。大事なことは、現代社会は専門家の支配を必要としているという一般的な偏見とは反対に、真実は専門家が善良な、賢明な、合理的なリーダーになる資格をもった候補者ではいささかもないということを理解することであり、専門家というものは、つまり専門家であって彼らの合理性はたんに技術的なものにすぎないということを知ることである。ユーゴスラヴィアの経験を総括しているマルコヴィチのつぎのような見解は注目しておくだけの価値が十分にあるように思われる。「均衡を保つために、またその権利を主張しうるために、自主管理機関は管理者を交代させる権利をもたなければならない。『素朴な』、『無知な』労働者評議会が善良で有能な管理者を解

雇するという現実的な危険は存在しない。ユーゴスラヴィアの自主管理の経験は、もし労働者評議会が管理者を解雇するとすれば、それは彼がまったく無能であるか、あるいは非常に権威主義的であるか、あるいはそれらの両者であるか、のいずれかであるということを知っている。そして本当に危険なのは、労働者がこの権利をあまりにもまれに、あるいは、あまりにも遅れて、すでに企業にかなりの損害があたえられてしまってから始めて、行使するということであり、そのために企業がひどい損失をこうむったままで操業されるということである。このように機敏に反応しないということは、社会主義における生産の有効性を危険におとし入れるのが、労働者参加があまりにも多すぎることよりも、それが少なすぎることであるということを示している。」マルコヴィチの見解が、自主管理の支持者によってどれほど重要な意味をもっているかは、改めて指摘するまでもないであろう。

以上、主にマルコヴィチの議論を中心に『プラクシス』派の自主管理論をみてきたのであるが、以上だけからもわれわれは、『プラクシス』派がたんに自主管理の理念を基礎づけそれを深め発展させてきただけでなく、ユーゴスラヴィアの自主管理運動の経験を総括し一般化することによって自主管理の理論に新たな諸要素を導入しこの理論を豊富化してきたことを認めることができる。彼らが発展させた理論は今日ますますその重みを増してきているように思われる。

#### 主要参考文献

- ミハイロ・マルコヴィチ『実践の弁証法』、岩田昌征、岩淵慶一訳、合同出版社  
 Mihailo Markovic: Entfremdung and Selbstverwaltung. In: Folgen einer Theorie. Essays über K. Marx' "Das Kapital", Suhrkamp. 1968.  
 Mihailo Markovic: The basic issues on self Management. In: "Praxis" 1-2. 1974. Zagreb.  
 Mihailo Markovic: From Affluence to Praxis. 1974.  
 Sztetar Stojanovic: Kritik and Zukunft des Sozialismus. Karl Hanser Verlag, München 1970.  
 拙稿『『プラクシス』派の自主管理論』、『自主管理社会主義』第4号所収。